

# 神奈川県新生児救急システムにおけるこども医療センターの役割

研究協力者

後 藤 彰 子

(神奈川県立こども医療センター新生児科)

## 目 的

神奈川県的新生児医療システムの中でのこども医療センターの役割を知り、こども医療センター NICU 入院患者について、疾患の種類、在院期間などから重症度を評価することを試みた。

## 方 法・結 果

昭和59年度（59.4 - 60.3）に神奈川県新生児救急システムで取り扱われた新生児は 1224 名であった（表1）。これらの新生児について地域別分布、体重構成を比較した。この中でこども医療センター NICU 入院児は 345 名であった。横浜地区の入院患者は県内の 50.9% で、こども医療センターは横浜地区の 55.3% を占めた。こども医療センターに入院した新生児 345 名を低体重（2000g未満）と新生児疾患という観点に分けて検討した。

2000g未満で未熟児以外に問題となった疾患は 102 例中奇形など 5 例であった（表2）。在院期間は 1000g未満で平均約 3 か月、1000 - 1499g で 2 か月、1500 - 1999g で 1.5 か月であった。2000g未満の死亡率は 6.9% であった。ここで取り扱う死亡は昭和62年 1 月までの全死亡を含めた。

表 1 59年度神奈川県新生児救急取扱患者

地 域	体重区分					死亡数
	～ 999g	1000 ～ 1499	1500 ～ 1999	2000 ～ 2499	2500 ～	
1. 川 崎	11	16	20	37	109	16
2. 横 浜	22	56	98	118	330	45
(KCMC)	(19)	(39)	(45)	( 56 )	( 186 )	( 21 )
	86%	67%	46%	47%	56%	47%
3. 三 浦	1	5	12	11	17	1
4. 湘 南	2	11	13	26	94	10
5. 西 湘	4	5	6	10	25	3
6. 県央・北相	1	15	25	33	91	9
計	39	108	174	237	666	84

表 2. 未熟児 (2000 g 未満) の合併疾患と平均在院日数

体重区分	症例数	合併疾患	死亡原因	平均在院日数
～ 999	20 (5)		RDS 1	95
			IVH 2	
			敗血症 1	
			重症仮死 1	
1000	39	多発奇形 1	18トリソミー 1	71
～ 1499	(1)	18トリソミー 1		
1500	43	肺重脈欠損 1	VATER症候群 1	
～ 1999	(1)	VATER症候群 1	1	49
		食道閉鎖 1		
	102 (7)			

S 59. 4-60. 3 ( )は死亡数

2000g 以上の児を疾患別に分けた (表 3)。死亡率は 8.3% で全疾患の 45% を CHD や消化管奇形などで占められていた。

表 3 NICU入院新生児疾患 (2000 g 以上) と平均在院日数

疾 患	症例数	死 亡 原 因	平均在院日数
呼 吸 障 害	24		20
羊水吸引症候群	8	MAS 1	21
先天性心疾患	23	CHD 8	55
重症仮死・痙攣	17	仮 死 2	12
頭蓋内出血	7		20
感染・発熱	18		11
嘔吐・哺乳障害	21		11
黄 疸	14		8
新生児メレナ	24		8
消化管奇形	32	イレウス 1	107
染色体異常・その他の奇形 (水頭症、髄膜瘤、脳瘤 ダウン症、5p <sup>-</sup> 、13q <sup>-</sup> )	37	ポッター 2	26
		顔面裂 1	
		ピエールロバン 1	
クレチン症	10		10
その他 (IDM 低血糖 メチルマロン酸血症)	19	メチルマロン酸 血症 1	11
計	206	17	

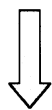
S. 59. 4 - 60. 3

## 考 察

神奈川県では昭和56年6月から新生児救急システムが発足した。さらに60年6月から産科救急も加わり周産期救急として運用されている。新生児救急システムは県内を6地域にわけ、新生児を取扱い得る県内の32病院が受け入れ病院となり、分娩施設と連携して新生児救急患者の診療にあたるので、院外出生のみを対象とする。

表1の体重分布からみると県内の1000g未満の48.7%、横浜地区の86%をこども医療センターが担っている。こども医療センターに入院した345例の疾患の内訳は表2、3である。1000g未満を除くと未熟性に合併する死亡は0である。我々の施設では2000g以上の児は低体重を主訴に入院することは少なく、表3に成熟新生児と同様に扱った。在院日数から重症度を評価すると消化管奇形が107日と長く、次に1000g未満の95日、1000-1499gの71日、CHDの55日となる。CHDは死亡率35%と高いため在院日数が低く出ている。

以上の結果から極小未熟児、消化管奇形、CHDが最重症疾患となる。これらの児の長期管理、予後、発育、発達の総合管理などは包括した医療が行える場所が望ましい。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



#### 目的

神奈川県的新生児医療システムの中でのこども医療センターの役割を知り、こども医療センターNICU入院患者について、疾患の種類、在院期間などから重症度を評価することを試みた。